

洗足学園音楽大学

大学音楽学部

教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報

2021 年度

コース

作曲コース

I

コースの
到達目標

21世紀は作曲の手法、様式が多様化しましたが、本コースにおける作曲は『楽譜を作成して音楽を伝え、残すこと』をもっとも重んじています。このような西洋音楽を中心に発展してきた作曲を志す者は、自分の内なる想いを楽譜にあらわすための様々なテクニックを身に付けなければなりません。

和声法や対位法など、19世紀頃までの作曲技法はもとより、20世紀以降の作曲技法まで、幅広い書法の修得により創造性を高めることが必要です。

実技レッスンや専門選択科目を通じて多くの音楽語法を身に付けるとともに、さまざまな編成による作曲・編曲を通して、あらゆる音楽シーンで活躍できる作編曲家となることが到達目標です。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「浄書と音源の制作」
- ②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」
- ③「管弦楽概論」および「管弦楽法」
- ④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」
- ⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」
- ⑥「音楽実技実習」
- ⑦「ソルフェージュⅠ～Ⅳ」および「ソルフェージュ研究Ⅰ～Ⅱ」

その他の専門選択科目も履修することが望ましい。

III

Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①「浄書と音源の制作」により、楽譜の書き方を専門的に学び、手書きにおいても、コンピュータ浄書においても正しく記譜できる力を養成します。

②「歌曲作曲研究Ⅰ～Ⅱ」および「合唱曲作曲研究」において、声楽や合唱の様式を専門的に学ぶことができます。

③「管弦楽概論」および「管弦楽法」により、オーケストラで用いられる楽器についての知識を得ることができ、実際に管弦楽や吹奏楽を書く力を修得します。

④「20世紀の和声法研究」および「20世紀の奏法研究」、そして⑤「20世紀の作曲技法Ⅰ・Ⅱ」において、古典的な技法にとどまらず、近現代の書法を体得することで、自らの音楽が独自性をもつきっかけを得ることができます。

作曲家にとってピアノ演奏など器楽に精通する必要があるため、⑥「音楽実技実習」において楽器の演奏と深く接することが大切です。

以上のすべての学修にあたって、その基礎となる力を育成するための⑦「ソルフェージュ」の学修は不可欠です。

コース

音楽・音響デザインコース

I

コースの
到達目標

本コースは、現代の音楽制作に関する分野を学びます。主に作曲家、録音、映像制作、プロデューサー、あるいはミュージック・クリエイターとして社会で活躍出来る人材を育てる事に主眼を置いています。その土台となるはコンピューターリテラシーと和声やコードなどのハーモニーです。これらを修得することにより、音楽作りの基礎を固めることができます。その上に様々なジャンルの編曲やマニピュレーションを学ぶことにより、一連の音楽制作を完結します。また、映像のための音楽の作曲はその応用であり、より充実したカリキュラムを設定しています。一方、録音は学内における多くの「現場」を経験することにより、どのようなシチュエーションでも的確な音響処理ができるようになるでしょう。さらに、インタラクティブな音楽表現を目指したMax/MSPのプログラミングや、作品を社会へ発信するツールとして、WEBデザインや映像編集やCG、あるいはプロジェクションマッピングなど映像演出の技術も得ることが可能です。

このように、多岐に渡る学生のニーズに対応したカリキュラムを設定しています。本コースで学ぶ事が出来る貴重な4年間を有効に生かして、音楽制作に関わる知識や技術を可能な限り幅広く身に付けてほしいと思います。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ジャズ・ハーモニー」
「ポピュラーミュージック・ハーモニー」
- ②「リズムセクション・ライティング」
「アドバンスト・アレンジテクニク」
- ③「DAW演習Ⅰ・Ⅱ」「Pro Tools演習」
「Max/MSP演習」「WEBデザイン実習」
- ④「サウンドエンジニアリング基礎理論」
「サウンドエンジニアリング応用理論」
- ⑤「ソルフェージュⅠ～」
- ⑥「和声学、対位法」
- ⑦「管弦楽法」
- ⑧「指揮法」
- ⑨メディアコンテンツ制作実習

III

Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

本コースのカリキュラムのカテゴリーの中でも「セオリー」、「アレンジテクニク」、「デジタル・オーディオ・ワークステーション」、「エンジニアリング」の4部門に含まれる授業は特に重要です。

まず、「セオリー」系に含まれる「ジャズ・ハーモニー」では、商業音楽における共通言語であるコードネームを基本としたハーモニーの基礎を学びます。これを学んだ上で、次の「ポピュラーミュージック・ハーモニー」において、ポップスの分野における様々なハーモニーの進行を身に付けます。ここまでは本人が志向する分野に係わらず、ミュージック・クリエイターとして基礎中の基礎となる部分なので、このコースの全ての学生に履修して欲しいと考えます。この後に続く「アドバンスト・ハーモニー」や「コンテンポラリー・ハーモニー」については、映画音楽家を志望する学生には必須の内容です。ポップス系作曲家を志望する学生であっても洗練された音作りを目指す者にとって「アドバンスト・ハーモニー」は、高度なテクニクでありながら多くの役立つ知識が得られると思います。

次に「アレンジテクニク」系に含まれる「リズムセクション・ライティング」と「アドバンスト・アレンジテクニク」は、その名称通りの内容の様々なテクニクを得るための講義で、作曲系の学生にとっては、とても魅力的な内容になっています。是非、履修して下さい。

「デジタル・オーディオ・ワークステーション」系に含まれる「DAW演習Ⅰ・Ⅱ」、「Pro Tools演習」においては、コンピューターや音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びますが、これも現代のミュージッククリエイターには欠かせない知識です。さらに可能であれば、表現の拡張のため「Max/MSP演習」も履修すると良いでしょう。

「エンジニア」系に含まれる「サウンドエンジニアリング基礎理論」、「サウンドエンジニアリング応用理論」は、録音を志望する学生については必修と言える講義ですが、作曲系の学生についてもこれからの時代は、このような知識が自分の音作りのために非常に重要になってくると考えます。

また、映像制作やその演出を主体としている学生は⑨を推奨します。

その他⑤～⑧までに書いた科目は、作曲系の学生には特に履修を勧めたいと思います。その他の共通選択科目も含め音大にいるからこそ得られる知識を貪欲に吸収して4年間を有意義に過ごしてほしいと思います。

コース	ピアノコース
-----	--------

—— I ——
コースの
到達目標

ピアノの演奏を行うために必要不可欠な技能を修得し、専門的な知識を身につける。
また音楽文化に関する広範な教養を得ると同時に、多様な価値観を持つ人々と興味、関心をともに分かち合い、見識を広め協調性を養う。
さらにピアノ演奏を通して自己を表現することに関心を持ち、文化や社会において積極的に活動する能力を高める。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「二重奏Ⅰ・Ⅱ」および「室内楽研究」
- ②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
- ③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
- ④「ピアノ指導法Ⅰ・Ⅱ」
- ⑤「和声学」
- ⑥「初見視奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」
- ⑦「音楽史」
 - (1)「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」 (2)「バロックの音楽史」
 - (3)「古典派の音楽史」 (4)「ロマン派、近・現代の音楽史」
- ⑧その他
 - (1)「ピアノ音楽鑑賞研究」 (2)音楽教室グレード対策講座Ⅰ・Ⅱ

—— III ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①「二重奏Ⅰ・Ⅱ」および「室内楽研究」
アンサンブルの学習は独習の機会が多いピアノ学習者にとって重要です。他者とともに音楽的なそれぞれの役割を理解してテンポやバランスなど、協調して演奏を行うことはアンサンブルそれ自体の学習にとって重要であるばかりでなく、独奏の際にも役立たせることができます。特にピアノ以外の弦楽器や管楽器奏者と学習を行うことは、それぞれの楽器の特性や音色の違いなどの理解を深め、ピアノ奏法においても音楽性や多様な音色での演奏能力を身につけるために必要不可欠です。二重奏ではまずピアノ連弾作品から学習を行います。2台ピアノ等も含めピアノ同士での学習も有益で、これらアンサンブルの学習を通じて他者との協調性を養っていくことになります。

②「歌曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」 ③「器楽曲伴奏法Ⅰ・Ⅱ」
歌のように、また踊りのように演奏したい、これはピアニストにとっての重要な目標として挙げられる項目です。フレー징の把握、レガートなどのアーティキュレーションの表現、テキストから読み取れる文学的かつ具体的な思考の具現などを通して想像力を豊かにすることはピアノ学習者の音楽性を養うための良い機会になります。さらに自分自身の音や歌い方を客観的に聞く習慣を育む事が出来る授業です。声楽や器楽奏者等他者の自己表現を通じての協調性や自らの自己表現等を学びます。

④「ピアノ指導法Ⅰ・Ⅱ」
ピアノ指導の方法を考察して実践することを通して、教育理念や現在に至るまでの各ピアノ指導法の研究を行うのがこの授業の目標です。幼児の身体、運動機能、心理発達などの基礎知識、教材研究、レッスン体験など、卒業後に指導する立場となり実際に生徒さんを指導する際に役立つための授業内容となっています。

⑤「和声学」

和声学の基礎である三和音をはじめとした長調・短調の和声学の理論と実施および分析を行うこの授業では学習の段階や能力に応じてきめ細かいクラス別の指導が行なわれます。ピアノの学習者にとって和声学で扱われる四声体を中心とした学習はピアノの作品中にみられる調性和声の和音の響きや非和声音を含んだ旋律線などの声部の動きを日常的に演奏することに直結する内容が多く含まれます。この授業での学習とともに実施課題や分析課題などをピアノで演奏して復習を注意深く行うことは特に有益です。次の「初見視奏」の学習とともにピアノ演奏に必要な専門的な技能を身につけることにつながります。

⑥「初見視奏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

ソルフェージュで学習する旋律等の読譜を発展させて、ピアノ作品の楽譜の読譜を通して、書かれている音楽の要素(テンポ、曲想、メロディー、和声、伴奏型など)をいち早く捉えてそれを実際にピアノで演奏する授業です。初見視奏そのものの上達はもちろんのこと、日頃のピアノ学習の際にどのように読譜を行い作品に対して効果的なアプローチをしていくかという点を学べるところが科目履修が有益である理由です。

⑦「音楽史」

音楽文化の歴史的な背景の学習は音楽研究に必要不可欠であり、また演奏の際にもそういった時代や地理的な特徴による様式をどのように活かすかが直接的・間接的に重要となります。ピアノ学習者が頻繁に取り扱うことの多いバロック後期から20世紀前半までの時代の音楽史の学習はもちろん念入りに行わなければなりませんが、それ以外の時代や地域の音楽の歴史についてもより多く捉えていくことがコースの到達目標で示された、音楽文化の広範な教養を身につけることにつながります。

⑧ その他

詳細は該当科目のシラバスを参考にしてください。

コース

管楽器コース

—— I ——
コースの
到達目標

管楽器コースでは、必修科目のレッスンから基本を学び、優れた演奏能力を身につけ、合奏授業等に於いて最も必要な協調性を養う事を、大切な目標に掲げます。

管楽器は単音でしか演奏出来ない楽器で、演奏家としてはソリストと言う場面もありますが、殆どの職業は合奏態の中に有ります。この現場で求められる事は「卓越した技術・音楽性」そして「協調性」なのです。また、吹奏楽指導者マスタークラスでは、吹奏楽指導法に加え、マーチングやポップスのスキルも学びます。教育者としての道を選ぶ者にとっても「優れた指導能力」と同時に学校という集団生活の中で、子供達とのコミュニケーションを図り、クラス全体の空気を読み取り、それらを良い方向に導く「協調性」を示す事が出来る能力が求められるのです。つまり、大学卒業後皆さんが活躍するであろう、あらゆる現場では「有能な技術」に加え「協調性」を兼ね備えた人材が求められているのです。これから皆さんは個々の演奏能力や音楽性、また指導能力を養うべく厳しい鍛錬の場に身を置くこととなりますが、学生生活の中に於いても職業の現場をシュミレートしながらの日々を送る事により、有能な新人として社会に羽ばたいて行ってくれる事を望んでいます。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ソルフェージュ」
- ②「和声学」
- ③「音楽分析基礎講座」
- ④「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」
「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
- ⑤「副科実技」(ピアノ)
- ⑥「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
- ⑦「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス

—— III ——
IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「ソルフェージュ」
音符への対応、基本的なリズム感、音程、フレーズ感等の能力を養う。
- ②「和声学」
楽譜を読む力、音符へのこだわり、調性、フレージング、音程感等の理解度を深める。
- ③「音楽分析基礎講座」
クラシック音楽の表現上のルールを知る。表現の理論的裏付けをする。
- ④「古代、中世、ルネッサンスの音楽史」
「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
取り組む音楽の歴史的な位置、その音楽が成り立って来た過去・未来を感じ、表現に役立てる。
鑑賞の立場に立った時、人類の社会的変遷と文化・芸術のかかわりが理解でき、広い音楽観を持つことにつながる。
- ⑤「副科実技」(ピアノ)
和声感を身につける。
スコアリーディングに不可欠な能力を養う。
ピアノ曲で基本的な音楽形式を学び、自分の専門楽器に生かす。
- ⑥「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
指揮法、合奏指導法、作編曲法を学び、指導者として必要なスキルを身につける。
- ⑦「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
在学中にマーチングバンド指導者ライセンス1級の取得を目指す。

コース	弦楽器コース
-----	--------

—— I ——
コースの
到達目標

弦楽器コースはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、ハープの専門コースがあり、実技指導を経験豊かな指導陣によりマンツーマンで受けることが出来ます。

A. 室内楽
演奏能力を共に高め合いながらより緻密なアンサンブルを勉強することが出来ます。

B 弦楽合奏
弦楽器の合奏に必要な能力を養うため、基礎力の養成に力を入れているストリングオーケストラの授業があります。クラシック曲はもちろん、本学園ならではの他コースとのコラボレーションをする機会もあり、年2回授業成果発表のコンサートを前田ホールにて行います。

C オーケストラ
交響曲や管弦楽曲などの音楽を国内外の一流指揮者や指導陣より学び、演奏会も豊富でオーケストラの仕組みを演奏を通して学んでいくことが出来ます。

国内外の演奏家や指導者による特別招聘レッスンも豊富です。クラシックのみならず様々な分野で活躍することが出来る音楽家を育てることを目標としています。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ソルフェージュⅠ～」
- ②「バロックの音楽史」
「古典派の音楽史」
「ロマン派、近・現代の音楽史」
- ③「和声学Ⅰ～」
- ④「音楽分析基礎講座」

—— III ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①「ソルフェージュⅠ～」
楽譜を読む上での基本であるリズム、音程、フレーズなどの訓練のために不可欠です。

②「バロック・古典派・ロマン派・近現代の音楽史」
バッハに代表されるバロック時代から、モーツァルト、ベートーヴェンの古典派、そしてロマン派等、その時代の歴史的な背景またはその時代における音楽の役割を学ぶ事は器楽奏者にとって欠く事の出来ない重要な学問です。

③「和声学Ⅰ～」
音楽の根源的な理解の上で、大変重要な勉強のひとつに和声学があげられます。ことに弦楽器は、ほとんどが単旋律の楽器といってもよいものですから、調性の勉強のためにも和声学的考察は重要です。和声学の知識なしに楽曲の分析、解釈は不可能と言ってもよいでしょう。

④「音楽分析基礎講座」
楽譜に提示されるあらゆる記号、約束事、また、和声学的解釈、音階等、読譜のための基本を学ぶ上で大変重要、かつ実地的な学問です。

コース

打楽器コース

I

コースの
到達目標

本コースでは様々な演奏形態の音楽で各種打楽器の奏法、豊かな表現を追求し、プロの音楽家や教育者、また、音楽を学んだ中から派生して見つけた道で活躍する人材の育成を行うことを到達目標としています。

その目標のためにはまず音楽と自分の演奏楽器についての知識を広げるために

- ・「実技練習で、基礎から始まる実力の向上を目指すこと」
- ・「楽曲のアナリゼと楽譜の読譜能力を身につけること」
- ・「各種打楽器の背景や、音楽の歴史を学ぶこと」
- ・「楽器の構造を学習して基本的なメンテナンス方法の知識を知ること」

が大切です。

また、オーケストラ、吹奏楽、各種アンサンブルへの参加や他コースとのコラボレーションの積極的な実践を推奨しています。それらの経験の中で人とのつながりや音楽表現の幅と視野を広げることは、卒業後社会に出てから必要となる、様々な場に応じた対応を取る力の修得に繋がります。

※吹奏楽指導者マスタークラスでは、吹奏楽指導者に必要不可欠なスキルを身につけることを目標とします。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ① ソルフェージュ I ～
- ② 和声学 I ～
- ③ 音楽分析基礎講座
- ④ 古代、中世、ルネッサンスの音楽史
バロックの音楽史
古典派の音楽史
ロマン派、近・現代の音楽史
- ⑤ 副科実技(ピアノ)
- ⑥ 「吹奏楽指導法」 ※吹奏楽指導者マスタークラス
- ⑦ 「マーチングディレクター概論」 ※吹奏楽指導者マスタークラス

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①、②、③ : オーケストラ等の中に組み込まれた打楽器パートを演奏する上ではもちろんのこと、打楽器だけの作品(ソロ、アンサンブル問わず)でも、楽譜を読むにあたり、単に音符の羅列をたどるだけではなく調性、音程、和音構成、フレーズなどを理解し、また、決められている基本的な約束事を知ることには大変重要です。
- ④ : 各時代の音楽史を学び、時代背景とそこでの音楽との関連、発展の歩みを知ることが作品へのより深い理解に繋がり、また、これからの時代の音楽のあり方、そこでの打楽器の位置づけなどを考察して行く手がかりとなります。
- ⑤ : スコアリーディングを学ぶ。また、打楽器以外の楽器演奏の基礎を習得することは特に将来的に何らかの形で教育・指導に携わる人達には非常に有益です。
- ⑥ : 指揮法、合奏指導法、作編曲法を学び、指導者として必要なスキルを身につける。 ※吹奏楽指導者マスタークラス
- ⑦ : 在学中にマーチングバンド指導者ライセンス1級の取得を目指す。 ※吹奏楽指導者マスタークラス

コース

電子オルガンコース

Ⅰ
コースの
到達目標

現代の音楽界に於いて、存在を浸透しつつある電子オルガンは、演奏・創作・教育とあらゆる面で魅力を持つ楽器である。楽器の持つ性格からも、クラシック・ポピュラーを初め、あらゆるジャンルの知識、理解が不可欠である。当コースでは、演奏家として、教育者として、いろいろな分野で活躍できるよう、経験豊富な活躍中の講師陣を揃えて、演奏・創作の両面からアプローチしている。それぞれの専門家より学ぶことで、技術のみならず、自分の楽器、そして音楽を、言葉や音楽で表現できるようになることを目指すものである。楽器の持つ多面性を利点として、幅広い音楽活動ができる人材を作ること为目标とする。

Ⅱ
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」
 - ②「電子オルガン演奏法」
 - ③「オーケストラ演習」
 - ④「ポピュラー奏法研究」
 - ⑤「創作演習」
 - ⑥「編曲演習」
- 以上に加え、演奏グレードマスター講座等、専門選択科目については、履修することが望ましい。

Ⅲ
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「電子オルガン・スタジオエレクトロニクス」では、楽器のさまざまな機能を音楽的に有効活用する方法を学び、さらにはコンピュータとの接続から音作りまでを幅広く研究していく。本番を行う場合の音響設定なども学び、それを実際の現場で試し経験を積むことにより、演奏家、指導者などに生かすことができるようになる。
- ②「電子オルガン演奏法」では、テクニックを学ぶのはもちろんのこと、音楽の解釈や演奏表現にまで及ぶ。自身の演奏力アップのみならず、指導法も学ぶため、演奏家としての技術、指導者としてのノウハウも持つことができ、論じることができるようになる。
- ③「オーケストラ演習」は、指揮者のもとスコアリーディングによってクラシックの管弦楽曲やコンチェルトを合奏すること学び、演奏と共にクラシックの様式なども学び、演奏家としての経験並びに指導者としての指導法などを実践を通して学んでいく。
- ④ポピュラー奏法研究は、ギター、ドラムス、ベースとのセッションを通じてポピュラー音楽のさまざまなスタイルやリズム、更にアドリブなども学ぶ。セッションを通して、人とのコミュニケーションなども学び、音楽と共に成長していく。
- ⑤「創作演習」では、理論と実習を主眼とする実践的な講座になっている。電子オルガンによるオリジナル作品を完成させることから、個々のレパートリーを増やしていく。
- ⑥編曲演習では、電子オルガンの多様性を経験すべく、クラシック、ポピュラーそれぞれの教員が、“私の編曲法”という観点から、個性豊かな講義を行う。幅広くスタイルを学ぶことは、個々の音楽の広がりを実現するだけでなく、指導者になる

コース

ジャズコース

—— I ——
コースの
到達目標

1 音楽は自己表現

人は、様々な方法で自分を表現します。生まれたばかりの赤ちゃんでさえ泣くことで自分を表現しています。さらに観察すると実は泣くだけではなく顔の表情や仕草でも自分を表現しているのにも気付くことでしょ。乳幼児でも様々な手段をつかって自分を表現しようとするのが人間ですから、成長するにつれてさらにその表現手段が広がっていくのは言うまでもありません。その人間の多種多様な自分の表現手段のひとつが芸術であり、その一つが音楽であり、そして、その音楽のなかの一つの表現手段がジャズというスタイルです。つまり、音楽は、たとえどのような性格の持ち主であれ、人が自分を表現したいという欲求の上に成り立っているのです。

2 ジャズについて

では、ジャズはどのような音楽なのでしょう？

「その場で感じたことを自由に表現することのできる音楽です」

その場で感じる表現は、アドリブというのもであったり、譜面にとらわれずに自由に演奏できたり、また、アレンジによって曲を自由に変化させたり、さらには自分の表現が凝縮された自作曲を作ったりするというジャズの自由さがあることで可能になります。その意味では、ジャズは本来人間が生まれてから常に自分を表現しているのに非常に近い形で自己表現ができる音楽と言えるでしょう。

3 到達目標

ジャズは「自由な音楽」です。ですので、ジャズコースで学ぶ学生が「いわゆる」ジャズだけをやっていく必要はありません。一般に言われる、ポップスをやっていく人もいるかもしれません。ファンクやフュージョンその他多くのジャンルの音楽をやっていても、「その場で感じたことを自由に自己表現しよう」という姿勢で音楽をすれば、それは全てジャズということになります。実際にジャズはそうにして全てのスタイルの音楽に影響を与えてきました。

ジャズコースではこのように、ジャンルにとらわれず「感じたものをその瞬間に自由に表現できる能力を身につけること」をカリキュラムの到達目標にします。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

ソルフェージュ（JZ専用）
ジャズハーモニー
ヴォイスिंग&オーケストレーション
アレンジング
アンサンブル／ラボ
ジャズ・コンポジション
サーヴェイ・オブジャズ、ジャズ作品研究

—— III ——
IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

自由に音楽で自分を表現するということは、ただ好き勝手に音楽をやることとは違います。自由に音楽をするためには表現する音楽の材料をいろいろな角度から知り、感じ、そして実際にそれを音で試す経験が必要です。

そのために必要な推薦科目：

1 音やハーモニーを聴くことのできる力

・ソルフェージュ（JZ専用）

2 曲のハーモニーを味わいその響きがどのようなしくみで成り立っているかを理解する

・ジャズハーモニー

3 曲を自分の個性で表現し、いろいろな楽器を用いる表現の技術を学ぶ

・ヴォイスिंग&オーケストレーション

アレンジング

4 奏法研究やその他の授業の内容をふまえ、他の楽器と共に音楽をつくることを学ぶ

・アンサンブル／ラボ

5 自らの曲創りができる力を養う

・ジャズコンポジション

6 ジャズの‘成り立ち’について学び自己表現の基礎を作る

・サーヴェイ・オブジャズ、ジャズ作品研究

—— I ——
コースの
到達目標

1. 演奏能力についての目標

基本奏法の習得、演奏技術の向上を目指した実習や合奏演習を通じて、音色にこだわった厳密な音程（音律）とリズム（間）に対する感覚を養い、演奏家としての必要不可欠な音楽的基礎能力を確実なものとする。合奏については邦楽アンサンブルのみならず、洋楽等、他ジャンルとのコラボレーション対応力を身につける。正確な読譜、楽曲分析、演奏解釈に基づき、古典から現代作品まで様々な様式の作品に取り組む。さらに既存の作品のみならず創作や即興演奏も試み、演奏家としての実力を養う。

2. 教育的能力についての目標

学校教育における邦楽器の活かし方や教育法を研究する。さらに未経験者、高齢者、障害者等を対象とした（想定した）邦楽器によるワークショップの実習を通じて、ワークショップリーダーやサポーターの能力を養う。

3. 知識面についての目標

自身が専攻する音楽ジャンルだけではなく、様々な分野の日本伝統音楽について理解し、正しい知識を持つ。また、日本伝統音楽との関連性を考慮しつつ、周辺アジアをはじめとして世界の民族音楽についての知見を広める。音楽を通じて日本文化に対する深い造詣と国際的な視野を持つことを目指す。

4. 演奏家としての目標

確かな演奏技術を基に伝統を踏まえた上で、豊かな音楽性と真の個性を確立し、国内外において活躍できる演奏家を目指す。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ソルフェージュ」
- ②「邦楽サウンド論」
- ③「邦楽ワークショップ2～4」
- ④「日本伝統芸能研究1～4」
- ⑤「日本音楽史」
- ⑥「東洋音楽史」
- ⑦「日本の伝統芸能と音楽」
- ⑧「古典邦楽作品研究」
- ⑨「現代邦楽作品研究」

—— III ——
IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

日本の伝統音楽は元来口伝を基本とし、楽譜は存在してもあくまでも目安に過ぎなかった。しかし、現代における情報化社会では多様性と即応性が求められ、現代作品においては五線譜で書かれているのが通常である。そのため、これからの邦楽奏者は各楽器の奏法譜とともに五線譜による正確な演奏能力が要求され、「ソルフェージュ」はその基礎となる。また、本コースにおける共通認識を構築する基幹授業として「邦楽サウンド論」が存在する。

近年、小中学校の音楽授業における和楽器導入を切っ掛けに新しい邦楽の教授法、教育法が望まれている。「邦楽ワークショップ2～4」は新時代の邦楽における音楽教育法のあり方を研究する授業になる。

自国の文化を理解することは国際的活動の上で必要条件であり、国内外で活躍する邦楽演奏家を目指す者にとっては尚更である。上記の講座はその目的に添う。

コース

ロック&ポップスコース

I

コースの
到達目標

現代の商業音楽では、1アーティストを世に送り出すために、多くのプロフェッショナルが関わります。ソロ、バンドを問わず、レコーディング、コンサート、宣伝、販売、マネージメント等、アーティスト一人だけの力ではカバーしきれない部分をチームワークで補いながら、「最高」を目指すのです。

この時大切なのは、チーム全員が同じ「最高」をイメージすること。それぞれが勝手な方向性・レベルで考えていては、よい結果は得られません。イメージを共有し、方向を定めることこそがプロデュースにおいて最も重要な要素なのです。

本コースでは、ミュージシャンに必要な不可欠な「個性」を1対1のレッスンで育てながら、バンドアンサンブルでチームプレイを経験し、さらにレコーディングやライブを通じて「最高」の結果を得るためのプロデュース・ワークを学びます。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「バンド・ワークショップ1・2」(1・2年次)
「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」(3・4年次)
- ②「レコーディング・セッション1・2」(1・2年次)
「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」(3・4年次)
- ③「R&P・ベーシックス」
- ④「R&P・セオリー」
- ⑤「R&P・ヒストリー」
- ⑥「ソルフェージュ I ～」

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「バンド・ワークショップ1・2」
「アドバンスト・バンド・ワークショップ1・2」
バンド活動のシミュレーションを行います。半期3回のレコーディング・セッション、半期末のライブを目標に制作・練習を行う、このコースの中心授業です。半期毎にバンドは再編成。ソロ・アーティストを目指すミュージシャンも、様々な個性、価値観に出会うことができます。
- ②「レコーディング・セッション1・2」
「アドバンスト・レコーディング・セッション1・2」
1年次からプロレベルのレコーディング・スタジオ・ワークを経験します。「いい音」を聞くことで「いい耳」を育てます。
- ③「R&P・ベーシックス」
ロック・ポップスを目指すミュージシャンに最低限必要な知識を習得します。音楽家の共通言語である譜面の読み方書き方、機材・コンピューターの知識、音楽業界の構造、レコーディング・マナー、ステージパフォーマンス等、多岐に亘ります。
- ④「R&P・セオリー」
ロック・ポップスの世界ではコードが作編曲やアンサンブルのキーワードとなります。コードがどのようなセオリーでできているのか、という初歩的な知識から始まり、コードをどのように繋げたらよい曲、アレンジができるのかを、実在のヒット曲を例にとり解説します。
- ⑤「R&P・ヒストリー」
ロックという言葉が音楽のジャンルを表す言葉として使われ始めてから約半世紀が経ちました。常に「新しいこと」「人とは違う何か」を追求し、チャレンジしてきた先人達のアイデアの中には、今も「使える」もの、あなたの感性を刺激するものがきっとあります。勉強というより、宝探しの講座です。
- ⑥「ソルフェージュ I ～」
初めて聞いたメロディーをすぐに口ずさめますか？
流れてくるリズムに合わせて自然に体は動きますか？
この授業は、ミュージシャンの命とも言える「耳」を鍛えます。

コース

声楽コース

I

コースの
到達目標

声楽は身体を楽器として共鳴させる事により、感情や自然の美しさ等を表現することが出来るすべての音楽の源である。本コースでは人の心に訴え聴く人に感動を与える舞台表現者を目指す為に、詩に関する知識・能力を養い、音楽表現・身体表現に必要な専門的講座を数多く用意し、演奏家、指導者、他それぞれの進路に合わせ科目を選択し研究する。発声のテクニックを向上させ、知識や教養を身に付け、感性を磨き、さまざまな経験を通して豊かな表現力を身に付ける事で、スケールの大きな声楽家として研鑽し成長することを目指す。

II

コースが推薦する
基礎科目名

- ①「声楽基礎演習Ⅰ－１」②「声楽基礎演習Ⅰ－２」③「声楽基礎演習Ⅱ－１」④「声楽基礎演習Ⅱ－２」
⑤「オペラ実習」
⑥「アンサンブル実習」
⑦「専門合唱」
⑧「イタリア歌曲研究」⑨「ドイツ歌曲研究」⑩「フランス歌曲研究」⑪「日本歌曲研究」
⑫「室内オペラスタディ」
⑬「ピアノ実技」
⑭「シアターダンス」
⑮「音声学」
⑯「合唱指導法」
⑰「音楽分析基礎講座」

III

Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「声楽基礎演習Ⅰ－１」②「声楽基礎演習Ⅰ－２」③「声楽基礎演習Ⅱ－１」④「声楽基礎演習Ⅱ－２」 声楽を学ぶ為の理論と実践の基礎を学ぶ。各国語のネイティブの講師によるディクシオンに基づく伊・独・仏歌曲、オペラやアンサンブルの演習、舞台表現の基礎を作るボディ・マッピング、アクティングなど、それぞれの分野専門の講師陣による指導により、将来どのような専門家として活躍していくか具体的なビジョンを持てる。
⑤「オペラ実習」 総合芸術であるオペラを1、2年生で養った基礎能力を基本に、実践的に研究する。
⑥「アンサンブル実習」 音楽史上、大変重要な分野である宗教歌曲を専門的に研究し、演奏技法を習得する。
⑦「合唱」 大編成から小編成まであらゆる分野の合唱曲を取り上げ演奏する。
⑧「イタリア歌曲研究」⑨「ドイツ歌曲研究」⑩「フランス歌曲研究」⑪「日本歌曲研究」 各国の言語の特色を理解把握し、表現する上での歌唱法を身につけ、幅広い感覚を持った声楽家になれるよう研究する。
⑫「室内オペラスタディ」1年間1つのオペラ演目に関する台本・時代背景・音楽分析などの解釈を学び、実際の公演までの舞台制作や上演に向けてのプロフェッショナルな演習とする。
⑬「ピアノ実技」楽曲の研究に欠かせないピアノ技術を学ぶ。将来指導者として求められるスキルにも必須である。
⑭「シアターダンス」 舞台では歌唱力と共に身体的表現が重要な要素となる為、本講座ではバレエ、日本舞踊、ジャズダンス、ソシアルダンスを取り上げ、舞台上で自由に表現する能力と体力、所作マナー等を習得する。
⑮「音声学」 声を出すための身体構造及び機能を学び、発声を科学的に研究する。
⑯「合唱指導法」 合唱指揮者としての知識と指導法を研究する。
⑰「音楽分析基礎講座」 楽曲を演奏する為には作品を分析する能力が必要であり、そのための大切な和声学への理解しやすい導入講座である。

※「オペラ実習」「アンサンブル実習」「合唱」は必ず履修するよう推薦する。

コース	ミュージカルコース
-----	-----------

—— I ——
コースの
到達目標

ミュージカルは、演劇と音楽が融合した総合舞台芸術の一つである。優れた舞台人になるためには、歌、ダンス、演技の基礎理論や専門知識を深く学び、それぞれの技術を向上させることが求められる。

本コースでは、一人ひとりの可能性を最大限発揮するために、理論・実践の両面から指導を受け、多彩なコースを持つ洗足学園音楽大学ならではのオリジナル企画・公演を経験することができる。また、プロの舞台稽古の見学、レコーディング、TV・コンサート出演など、本物に触れる機会を通し、個人のレベルアップを目指している。英会話・ソルフェージュ・音楽理論等、ニューヨークやロンドンの教育システムを参考としたカリキュラムを通して、将来幅広く世界で通用するプロフェッショナルなミュージカル俳優となることを目標とする。

—— II ——
コースが推薦する
基礎科目名

- ①「ヴォイストレーニング」
- ②「英会話講座」
- ③「ミュージカル概論」
- ④「舞台芸術概論」
- ⑤「演技論」
- ⑥「戯曲論」
- ⑦「基礎音楽理論」
- ⑧「ソルフェージュ」
- ⑨「舞台音楽論」
- ⑩「演出論」
- ⑪「ワークショップリーダー養成講座」
- ⑫「音楽分析基礎講座」

—— III ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ①「ヴォイストレーニング」専門のヴォイストレーナー、もしくはミュージカルに精通した声楽コースの講師による歌のレッスン。(個人レッスン40分)
- ②「英会話講座」将来、ミュージカルの本拠地(ニューヨーク・ロンドン)で活躍する事を想定した、実践的な英会話(台詞やステージマネージメント等で役立つ)の習得。
- ③「ミュージカル概論」CD・DVD・ビデオを使用し、オペラ・オペレッタからミュージカルに至る歴史的背景や日本の現状を解説。アメリカ、イギリス、日本の代表的なミュージカル作品を取り上げ、総合芸術の一つとしてのミュージカルの位置づけを考える。
- ④「舞台芸術概論」日本における歌舞伎や能などの古典芸能、西洋のギリシャ悲劇からバレエ、オペラなどの舞台芸術全般に関する講義。
- ⑤「演技論」演技というものがどのように捉えられてきたのか考察するとともに実際に演技実習を行う。
- ⑥「戯曲論」テキストを読む力を徹底して鍛える。
- ⑦「基礎音楽理論」音楽理論の初歩を中心に基礎力を徹底的に身につける。また、ポピュラーやジャズ、民族音楽などを含む多くのジャンルの音楽に触れながら、楽曲の様式を学ぶ。
- ⑧「ミュージカルソルフェージュ」楽譜を読むこと、書くこと、歌うこと、音楽の成り立ちを考えること等作品と演奏との関わりを追求し、音楽大学生として必要なソルフェージュ能力の習得。
- ⑨「舞台音楽論」ミュージカル音楽を中心に、その作曲技法やストーリーとの関連性について分析する。
- ⑩「演出論」舞台芸術における演出の仕事とは何かを、演技、美術、照明、音響、衣装、メイクなど各方面から明らかにするとともに、世界の名演出家の思考・業績を研究する。芸術面だけでなく、現場における演出家の実務面の役割についても講義する。
- ⑪「ワークショップリーダー養成講座」近年さまざまなジャンルでワークショップのニーズが高まっており、それに対応できるワークショップリーダーに必要なスキルやプログラムの作成・進行について学ぶ。
- ⑫「音楽分析基礎講座」楽曲を演奏するために必要な、作品に対する理解力・分析力を学ぶ。

コース

バレエコース

Ⅰ
コースの
到達目標

身体で音楽を奏でるバレエは、言葉を使わずに感情を表現し、音楽・美術・踊りが融合した総合芸術である。

プロフェッショナルなバレエダンサーになるためには、優れた芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどが求められる。本コースでは、クラシック・バレエの正確なポジション、質の高い動きやテクニックを身に付け、コンテンポラリーなどさまざまなスタイルの踊りにも対応できるように指導していくと共に、音楽大学ならではの多彩な授業により、表現者、芸術家としての教養を学生が主体的に身につけることを大切にしている。

学生は、プロのバレエ団と共に公演に参加することで本物に触れ、舞台での表現を学び、それぞれのレベルアップを目指すことができる。また海外研修などで世界のバレエ教育に触れて視野を広め、将来幅広く世界で活躍できる舞踊家となることを目標にすることができる。

Ⅱ
コースが推薦する
基礎科目名

1. 専門選択科目(各コース)
 - ① バレエ研究
 - ② バレエ実習
 - ③ 身体表現実習
 - ④ ダンスパフォーマンス
2. 専門選択科目(全コース共通)
 - ⑤ 音楽史
 - ⑥ ロマン派、近現代の音楽史
3. 一般総合科目
 - ⑦ 舞踊史
 - ⑧ 解剖学
 - ⑨ 動作学
 - ⑩ 運動生理学
 - ⑪ 栄養学

Ⅲ
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

①② バレエは「目で見える音楽」とも言われる総合芸術であり、ダンサーの身体は楽器である。クラシック・バレエのクラスレッスンを行い、作品に触れることによって、芸術性、身体能力、個性、音楽性、テクニック、コントロール、コーディネーションなどを向上させることができる。

③ バレエ団の垣根を越えて、幅広くバレエの技術を習得する。またコンテンポラリーダンスや、キャラクターダンスについて学び、多彩な表現ができるようになる。

④ ジャズダンスのあらゆるジャンル(ブロードウェイ、ジャイブ、リンディホップ、ブギなど)の基礎を深め、それぞれの個性にあった魅せ方と表現の可能性を模索し、身につける。

⑤ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、バレエを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。

⑥ バレエの名曲が数多く作曲された、ロマン派時代から、近現代までの音楽の歴史を、政治・社会・文化・思想との関わりを考慮しながら概観する。

⑦ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解できるようになる。

⑧⑨ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶことができる。

⑩⑪ 怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身につけることができるようになる。

コース

声優アニメソングコース

I

コースの
到達目標

声優アニメソングコースでは、日本国内にとどまらず海外からも熱い注目を集めているアニメを中心とした文化芸術において、「声優」「アニメソング歌手」としてプロフェッショナルな世界で活躍する「声のスペシャリスト」を養成することを目標にしている。本コースでは、音楽大学が長年培ってきた「声」の魅力を高める多彩なカリキュラムを活かし、「演技」「歌唱」「ナレーション」に関する専門知識を深く学んだ上で、身につけた技術を数多くの本番で発表することによって、実践を通じて専門を磨きます。

II

コースが推薦する
基礎科目名

＜必修科目＞
「ヴォイスアーティスト技法研究」（1～4年次必修科目で30分の個別指導）
「ASアンサンブル実習」（1～4年次必修科目で学年別にイベント制作）
＜1年次基礎科目＞
「ASスタジオワーク」（1年次必修科目）
「ヴォイスアーティスト基礎演習」「ナレーション基礎演習」（1年次に履修）
＜ゼミ＞
「音声表現実習」（2～4年次に履修。2つのゼミのうち1つが必修科目となる）
「ヴォイスアーティスト演習」（2～4年次に音声表現実習と連続で3コマを履修）
＜演技＞
「演技論1」「演技論2」「演出論1」「演出論2」
＜歌唱＞
「アニメソング総合演習」（1～4年次に履修する学年別クラスの独唱の授業）
「ヴォイスアンサンブル」（1～4年次にASコースが全員履修する合唱の授業）
＜ダンス＞
「ASダンス演習」（1～4年次に履修する学年別クラスのダンスの授業）
「シアターダンス1-1」「シアターダンス1-2」（1年次に履修するバレエの授業）
「伝統芸能実習1」「伝統芸能実習2」（2年次に履修する日本舞踊・狂言の授業）
＜創作科目＞
「コンテンツ制作1」（1年次に履修。ボイスサンプルの作り方など基礎的な授業）
＜音楽基礎科目＞
「音楽理論入門」「音楽分析基礎講座」（1年次に履修。音楽の基礎を学ぶ）
「ソルフェージュⅠ」「ソルフェージュⅡ」（1年次に履修。音楽の基礎を学ぶ）

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

ASコースのカリキュラムは、「演技」「歌唱」「ナレーション」の三つの領域から成り立っている。三つの領域の中から、学生は自分の志向にあった領域を選び、「ヴォイスアーティスト技法研究」で、音楽大学ならではの個別指導の視点を取り入れた、綿密な「レッスン」を受けることができる。

1年次の「ASスタジオワーク」では、録音スタジオでの現場に対応するための、基本的なノウハウを身に着ける。また「ヴォイスアーティスト基礎演習」では発声発音の基礎、「ナレーション基礎演習」ではナレーションの基礎を学ぶ。

2年次から4年次にかけては、「音声表現実習」「ヴォイスアーティスト演習」という科目名の「ゼミ」を設定している。多様な学習分野の中から、学生ひとりひとりが自分の志向に合わせて、毎年「ゼミ」を二つまで選択して履修することができる。この必修科目では、学年の垣根を越えた「縦割」のクラス編成を導入することによって、全コース的なコミュニケーションの促進が図られる。アニメソングのライブや、朗読劇、ナレーション、アニメを題材としたミュージカルや舞台など、学生のニーズにあわせて、バラエティ豊かで斬新な内容の「ゼミ」を整備している。

学年別に「横割」でテーマを設定する「ASアンサンブル実習」では、多様な指向を持つ学生が、同期で一丸となって、演奏会や公演を制作する体験を共有する。「演技」については、学年ごとに「演技論」「演出論」「舞台芸術概論」の講義があり、演技に関する歴史や理論をアカデミックな視点で学ぶ。「アニメソング総合演習」では、アニメの物語や役柄を、様々な角度から解釈しながら、歌唱能力を高めることを目指す。「ヴォイスアンサンブル」では、音楽のジャンルの枠に捕われず、コーラスを中心とする声のアンサンブルを学ぶことができる。さらにクリエイター指向を持つ学生のニーズに対応して、「コンテンツ制作」の授業も用意している。音楽の基礎を学ぶ講義も充実しており、「音楽理論入門」「音楽分析基礎講座」「ソルフェージュⅠ」「ソルフェージュⅡ」の四つの講義では、「初年次教育」強化の方向性を、ASコースの学生の特性にあわせて拡充し、普遍的な音楽の理論を学習する。アーティストとしてパフォーマンスする際に要求される「ダンス」も、重要な学習分野に位置づけている。「ASダンス演習」に加えて、他コースで開設しているバレエや日本舞踊、ジャズダンスなど、様々なジャンルのダンスを履修することができる。

コース

ダンスコース

——Ⅰ——
コースの
到達目標

ダンスは言語を超えたコミュニケーションであり、身体で音楽を表現する総合芸術である。本コースでは、様々なジャンルのダンスを学ぶことで、プロフェッショナルなダンサーに求められる技術と、個性豊かな表現力を身に付ける。自主公演においては、振付からパフォーマンスへとつなげるダンスの構成を体験するとともに、公演の企画制作を行う。多彩な実技と講義の授業を通して知識と教養を深め、数多くの本番を経験することで、世界で幅広く活躍できるダンサーを育成することを目標とする。

——Ⅱ——
コースが推薦する
基礎科目名

1. 必修科目
 - ① 舞踊研究
2. 専門選択科目(各コース)
 - ② 舞踊創作研究
 - ③ ダンスパフォーマンス
 - ④ 身体表現実習
 - ⑤ シアターダンス
 - ⑥ バレエ実習
 - ⑦ コンテンツ制作
3. 専門選択科目(全コース共通)
 - ⑧ 音楽史
4. 一般総合科目
 - ⑨ 舞踊史1／舞踊史2
 - ⑩ 解剖学／動作学
 - ⑪ 運動生理学
 - ⑫ 栄養学

——Ⅲ——
Ⅱの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標との
関連性について

- ① 専門として選択したジャンルのダンスを追求し、学期末の公演に向けた練習を通じて、専門分野で必要とされるテクニックを深め、アーティストとしての表現力や音楽性を磨く。
- ② 自主企画公演に向けて、振付の創作過程を学ぶ。
- ③④⑤ 様々なジャンルのダンスを幅広く学ぶ事で、ダンサーとして豊かな表現力を身に付け、多様なスキルを修得する。
- ⑥ あらゆるダンスの基本となる、クラシックバレエの基礎を学ぶ。
- ⑦ パソコンで楽曲や映像を編集するスキルを学び、自分のスタイルに合った音源や動画を制作する。
- ⑧ 日本と西洋の音楽を対象とし、その現代に至る大きな歴史の流れを理解し、ダンスを志す者にとって不可欠な音楽史の基礎的理解力を養う。
- ⑨ 舞踊史を概観するとともに、その歴史を音楽やオペラ、文学、美術などとの関連において理解する。
- ⑩ 理にかなった体の動き方を習得するために、関節や筋肉など身体の機能について科学的に学ぶ。
- ⑪⑫ 怪我を予防し、ボディ・コンディションを整えるための基礎知識を身に付ける。

コース

ワールドミュージックコース

I

コースの 到達目標

本コースは、専攻楽器、音楽ジャンルが多岐にわたり、到達目標も専攻によって違いがありますが、コース全体の目標として次の3つがあります。

1. 各自の専攻する楽器、音楽を探求し、演奏技術および表現力の向上を図り、伝統的なスタイルによる演奏が確実にできること。
2. 新しい表現方法も探り、自身で演奏と簡単な作曲の両方が行えるようになること。
3. 世界のさまざまな音楽文化を理解し、共演者と協調しあいながらアンサンブルができる。

本コースの特徴として、演奏家としての学習だけに留まらず、クラシック系の作編曲や、より活動の幅を広げるための録音や各種メディアを活用した創作の勉強も可能です。録音系の学習では、マイクを通した音と「生」の音との違いを知覚できるようになります。また、作編曲系の学習を通して、さまざまな楽器やアンサンブルに対応できる能力が身につきます。

演奏家として新たな音楽のあり方を模索し、自分の理想の音と音楽を見出せるようになります。

豊かな感受性をもち、どのような場にもふさわしい音楽を提供できる音楽家になっていきましょう。

II

コースが推薦する 基礎科目名

- ①ワールドミュージック概論1～4
- ②ワールドミュージック演奏論1～4
- ③和声学Ⅰ～、ジャズハーモニーⅠ、Ⅱ
- ④DAW演習Ⅰ、Pro Tools入門
- ⑤音楽史
- ⑥音楽分析基礎講座
- ⑦楽器学、諸民族の音楽
- ⑧スタジオレコーディング演習、サウンドエンジニアリング基礎理論、録音技術研究
- ⑨即興演奏講座

III

Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

- ①ワールドミュージック概論
(いわゆる「クラシック音楽」とよばれる西洋芸術音楽をはじめ、~~この1文削除~~ インド、~~(ラテン削除してフラメンコに変更)~~ フラメンコ、南米、アパラチアなどの音楽の旋法やリズムの基礎理論を知識と感覚の両方から習得していきます。それぞれの音楽のスタイルでの簡単な作曲、即興へのアプローチとなります。

- ②ワールドミュージック演奏論
いわゆる「クラシック音楽」とよばれる西洋芸術音楽をはじめ、様々な音楽の基礎理論を学習しながら、聴感覚やリズム感を訓練します。また、さまざまな演奏スタイル、音楽解釈を学び、ソロやアンサンブルにおいて必要とされるスキルを身につけていきます。

- ③和声学Ⅰ～、ジャズハーモニーⅠ、Ⅱ
音楽を専門とするものにとって、必要不可欠な和音に関する学問。様々な和音の扱い方を習得することで、自身の作曲、編曲、即興の基本となっていきます。同時に、楽曲の演奏において作曲家の意図することへの理解の一助にもなります。

- ④DAW演習Ⅰ、Pro Tools入門
シンセサイザーの原理、オーディオの知識や音楽編集ソフトの取り扱いの基礎を学びます。演奏上の新しい表現方法の模索に活用できるようになります。

- ⑤音楽史
西洋音楽と日本音楽の歴史をたどりながら、各時代の音楽のスタイルを講義と生演奏により学んでいきます。西洋音楽、日本音楽の音の響きの移り変わりを理解することにより、他の音楽への理解も容易になります。また、演奏家が醸し出す雰囲気、息づかいを捉えることができ、演奏家としての姿勢も学べます。

コース

ワールドミュージックコース

⑥音楽分析基礎講座

西洋音楽の古典派、ロマン派を中心とした楽曲の和声分析の基礎を学びます。和声学でも述べたように、楽曲の演奏において作曲家の意図することへの理解の一助となります。

⑦楽器学、諸民族の音楽 ⇒楽器学の開講が不明なため後日

世界の多様な楽器、音楽文化そして音楽と人間の関わりについて学びます。音楽のみならず社会的な価値観の違いなども考えることになり、コースの到達目標の3に掲げた「豊かな感性をもち、どのような場にもふさわしい音楽を提供する音楽家」への第一歩となります。

⑧スタジオレコーディング演習、録音技術研究、サウンエンジニアリング基礎理論

録音系の授業ではマイキングやエフェクターの基礎知識を学び、自由なサウンドの構築方法を会得します。自らの楽器を通してセルフプロデュースができるようになります。

⑨即興演奏講座

自由な即興演奏を学びます。自分のやりたい音楽を再確認するとともに、共演者との音楽的コミュニケーションをとる能力が向上します。

コース

音楽教育コース

I

コースの
到達目標

音楽教育コースは、「音楽を愛好する人を育てる」ことについて学ぶコースです。将来、学校の教員、吹奏楽や合唱のインストラクター、特別支援の指導員、生涯学習や音楽教室の講師など、各分野の指導者として活躍できるようになるために、またはその他の音楽に関わる職場などで社会人として活躍できるように、4年間かけて研鑽を積みます。その研鑽の対象として、音楽教育コースのカリキュラムは、和声学やソルフェージュなどの「基礎能力」、作曲や編曲などの「創作表現」、声楽やピアノ、言語表現などの「実技と実習」、音楽教育研究や音楽教育総合講座などの「専門研究」、音楽史などの「専門教養」といった5つを柱としています。

これら音楽の指導と実践、音楽の企画と運営に関する知識と能力を体得し、幅広い教養を涵養して、音楽を世に広めることに貢献できる力を着実に身に付けることがコースの到達目標です。

II

コースが推薦する
基礎科目名

1. 専門選択科目(各コース)

- ①音楽教育研究
- ②音楽教育総合講座
- ③ピアノ実習
- ④声楽実習
- ⑤言語表現演習
- ⑥作曲法・編曲法

2. 専門選択科目(全コース共通)

- ⑦和声学 I
- ⑧音楽史

III

IIの基礎科目の
推薦理由と
コースの達成目標
との
関連性について

①「音楽教育研究」(音楽教育研究)と②「音楽教育総合講座」の2科目は、コースの中核をなす授業です。音楽に関する基礎的な素養を身に付け、実践的な演習も加えていきながら、音楽の指導に関わる技能と知識、教員採用試験に受かる力を身に付けるべく、専門的に研究していきます。カリキュラムの5つの柱においては「専門研究」の項目に類する科目です。

音楽教育の分野で演奏の実践は不可欠です。特に指導の現場ではピアノを弾きながら歌い教えることを求められることがしばしばです。③「ピアノ実習」、④「声楽実習」では、個人レッスンを通じてピアノと声楽の基礎演奏力を養います。⑤「言語表現演習」では、「書く力」、「話す力」を徹底的にトレーニングし、プレゼンテーションとコミュニケーションのスキルを養います。以上②～⑤は、カリキュラムの5つの柱において「実技と実習」の項目に類する科目です。

⑥は、楽曲分析や諸形式による作曲・編曲を通して様々な音楽語法と音楽表現の理解を深め、あわせて合唱や合奏の編作のノウハウも学びます。カリキュラムの5つの柱においては、「創作表現」に類する科目です。

⑦は、西洋音楽の伝統的な音楽書法を学ぶための必須の理論と実習です。カリキュラムの5つの柱においては「基礎能力」に類する科目です。

⑧は、カリキュラムの5つの柱における「専門教養」の項目での根幹となる科目で、教職科目の1つでもあります。学校教育でとりあげられる、西洋と日本の音楽の源流から現代までの歴史を実演を目の当たりにしながら学ぶという、講義と生演奏が一体となった講座です。

コース

音楽環境創造コース

Ⅰ コースの 到達目標

本コースは、音響、照明、制作に関する分野を学び、それぞれの分野の専門家を育成します。また、各分野は横断的に学習することができるため、4年間を通じて舞台監督としての素養も養うことができます。1年次からスタートする実習では、仕事の流れや基礎的な技術を学び、2年次には各自が自分の役割を把握し、適切な行動ができるようになります。3年次には、より高度なシステムを活用できるようになります。4年次には、本コースの3分野に共通することですが、技術の先に求められる”表現”を追求できるようになるでしょう。

これらを実現するためには、技術を活かすための音楽センスや音楽の構成を理解する能力が求められます。そのため、上記3つの分野の他、他コースのレッスンを主科として選択できるように整備されています。音楽と専門技術をバランス良く学習して欲しいと思います。

Ⅱ コースが推薦する 基礎科目名

- ①「公演実習」
- ②「音楽環境創造研究」
- ③「舞台制作研究1-1,1-2」
- ④「舞台音響研究」
- ⑤「舞台照明研究」
- ⑥「フィールドインターンシップ」
- ⑦「応用合奏実習」
- ⑧「音楽理論入門」「ソルフェージュ」

Ⅲ Ⅱの基礎科目の 推薦理由と コースの達成目標との 関連性について

①「公演実習」と②「音楽環境創造研究」は、コースの中核となる実習です。各分野の専門技術を学び、公演実習を通じてその技術の定着を図ります。また、実践の中でしか得ること出来ないコミュニケーションやテクニックを体得します。

③「舞台制作研究1-1」では、会場のシミュレーション、照明、音響のプランニングに必要なCADソフトウェア、“Vectorworks”を学びます。「舞台制作研究1-2」では舞台に関する必要な基礎知識を習得します。

④「舞台音響研究」⑤「舞台照明研究」は、音や照明を取り扱う上で必ず知っておくべき基礎知識を学びます。実施の現場では詳細な説明が難しい事柄について深く掘り下げていきます。

⑥「フィールドインターンシップ」は、学外のイベントや仕事にインターンシップと参加した場合、単位が付与されます。実際の現場を体験することにより、将来を具体的にイメージすることができでしょう。

⑦「応用合奏実習」では、学生によるイベント企画の立案や、一線で活躍する各分野の”プロ”をお招きして実際の仕事を学ぶなど、学生の能動的な活動を主体とする講座です。

⑧「音楽理論入門」「ソルフェージュ」は、音楽の構成を把握するための基礎ですので、専門技術を活かすための重要な能力になります。将来信頼されるスタッフになるためにも是非履修してください。